

# 恒川武敏先生の憶い出

上 田 千 秋

(佛教大学教授)

恒川武敏先生の憶い出を語ることは哀しいことです。先生は昭和十一年、本学の前身である佛教専門学校を卒業され、ついで大正大学で仏教学を専攻された、いわば佛教大学にあっては生え抜きの方であります。表現はおかしいかもしれませんが、佛大にとって譜代大名であった先生の憶い出を、外様というべき俗人の私が語ることは適切を欠くとしか言いようがありませんが、同じ社会福祉学科に所属して、相当長期間、先生の聲咳に接する栄をになった一人として、お許しを頂いて、しばらく、あれこれ、先生のことについて語らせて頂きます。

先生が第二次大戦後、軍服を脱いで京都市役所民生局に奉職されたのは昭和二十三年五月二十三日ということになって

います。丁度その頃、私はいまの植物園の中にありましたアメリカ進駐軍の一下級将校の宿舍のハウス・ボーイをしておりました。当時はマッカーサー専制時代で、各地で争議が頻発し、下山事件や三鷹事件がおきた不安の時代で、大企業の人員整理や、公務員の削減が集中的に行なわれた頃でしたから、常識的に考えますと、とても京都市役所に先生が入れた筈がないのですが、そのへんのいきさつを先生に聞く機会をついに逸してしまいました。これは私の推測であります。先生は、佛専の学生時代から社会事業に関心をもっておられ、当時、京都市社会課長であった漆葉見龍氏をはじめ、佛専の先輩で、京都市の社会事業行政に影響力をもった人々から相当囑望されておったこと、そんな御縁で京都市にお入りになったので

はないかと考えられます。

それから、京都市を退職される昭和四十三年に至るまで、先生は専ら生活保護行政部門を中心に活躍されました。民生局指導係長として北区福祉事務所長として、或いは左京区福祉事務所所長として、社会福祉の第一線行政のベテランとしての先生のお名前を、私が初めて伺ったのは、昭和二十七、八年頃でありました。ようやくその頃私は、大阪市の民生局に就職することができたからであります。当時は、六大都市民生協議会といったような組織などがあって、とくに京阪神の民生関係公務員は仲好くしていましたから、佛大で机を並べる以前からお近づきになれたというわけです。

佛大社会福祉学科の前身は、昭和三十七年四月に仏教学科から分れて発足した仏教学部仏教福祉学科であります。恒川先生が京都市に在動中、乞われてこの仏教福祉学科の非常勤講師として仏教福祉学特殊講義を担当されるようになったのは、その翌年の三十八年四月からであります。この仏教福祉学科は、ついで四十年四月からは文学部社会福祉学科として発足することになります。当時の主任教授は故秦隆真教授でした。この年、私も非常勤講師として初めて佛大にお世話に

なるようになったのですが、当時の学科の実質的な専任者は秦先生と花田先生だけだったようですから、恒川先生は、京都市の激務のかたわら、相当多くの科目を担当され苦勞なされたのではないかと思います。

昭和四十二年四月より文学部社会福祉学科は社会学部社会福祉学科として再発足します。当初、大学側は、先生を公的扶助論ならびに施設経営論を担当する専任教授として迎えざる意向をもっていましたが、先生は、未だ京都市在動中であることを理由として正式就任を承諾されませんでした。翌四十五年三月に、先生が京都市を円満に退職されましたので、佛大に専任教授としてお迎えできるものと期待してお願ひいたしましたところ、「わしは教授の器ではない。専任講師なら承諾する」ということで、なかなか教授になって貰えませんでした。同年夏、先生はまた浄土宗務庁に乞われて教化部長に就任されました。そこで私共はこのこお山に出かけて行って、何度も直談判をして、「お山の仕事をやめて、佛大に戻って欲しい」と頼みこみました。秦先生や花田先生の熱意に打たれて、承諾され、恒川教授が実現したのが、昭和四十四年春のことであります。それから、先生が佛教社会事業研究所で

去る四月二十二日にお亡くなりになるまで、実に満十二年の間、文字どおり寢食を忘れてわが佛教大学の存続と発展のために献身されたのであります。

この間四十六年四月、社会福祉学科を専攻する大学院修士課程が、翌四十七年には佛教社会事業研究所が開設され、遂に五十一年度より社会学・社会福祉学専攻の博士課程が認可・開設されて、佛教大学における社会福祉教育が漸く、名実ともに客観的評価に耐え得るようになったわけですが、この間に、長期間にわたって学科主任の激職を重ねられ、また秦隆真先生御往生後は、佛教社会事業研究所長として、機関誌『佛教福祉』の刊行や浄土宗寺院の社会事業活動状況調査の実施に当って指導的手腕を発揮されたのであります。

また連合赤軍五人が軽井沢「浅間山荘」に籠って銃撃戦を展開した直後の昭和四十七年の三月からアラブ・ゲリラ五人による日航ジャンボ機爆破事件や金大中事件で騒いだ四十八年度にかけては学生部長として、本学の学生生活全般にわたる至難な問題処理に当られたのであります。更に昭和五十四年度より、お亡くなりになる寸前まで佛教大学学会委員長として、大学教職員の学問研究水準の向上のために少なからぬ貢

献をされたのであります。

このように恒川教授はお亡くなりになるまでの間、毎年、何らかの学内の要職を兼ねておられました。専任教員として一定の講義・演習を消化し、ゼミに所属する学生を指導し、実習施設との関係を調整し、その上で部長ないしは学科主任の激務を果すことは至難のわざであります。たとえば学科主任として出席せねばならない学内委員会やその他の会合は実に年間一五〇回をこえます。会議によっては相当長時間に及ぶことがしばしばあります。だが、先生は、殆んど不平不満の声をもらされず、その重責を静かに消化されていたのであります。

だが晩年の先生は、三年前から、年度末に近づくにつれて、辞意をもらされるようになりました。だがその都度、水谷学長や私共が中心になって、「もう一年待って下さい、今先生に辞められると学科が成り立ちませんから」と懇願し続け、本年三月になって、漸く先生が専任の地位を離れられることに同意したのであります。それも、先生に対して、囑託教授として、大学院に出講して頂くこと、佛教社会事業研究所長としての職務をもう少し続けて頂くことという、無理な条件

をつけてであります。

幸い、先生は、私共の無理な願いを聞き届けて下さいました。「専任を外して貰ったのだから、ゆっくり勉強してみたい」と言われた先生は、かねてから水子地蔵やポックリ信仰などの民間信仰と社会事業についての組織的な研究を意図しておられました。事実、先生は、近年その方面の文献を集めておられましたし、私共も、研究所の机によくゆっくり坐れるようになった先生のこれからの研究に大いに期待していたのです。成熟社会に入ってから、量の経済学の欠陥が露呈され、質の経済学が盛んに説かれるようになりましたが、社会福祉の学問研究の世界でも、日本の風土的な質的特性を意識した研究の必要性が認識されはじめたからであります。キリスト教とくにプロテスタンティズムの価値意識の強い社会福祉理論が日本には定着し難いことを、先生は、長い社会事業実践と教育の生活を通じて早くから見抜いておられたのであります。

先生の遺された研究業績は決して多くはありません。建設・発展期にあった佛教大学は、先生に充分な研究時間を保障する余裕がなかったからであります。生活保護行政のペテラ

ンであった先生に、もしも過去十二年間に研究時間のゆとりがあったとすれば相当な業績を残されたに違いないことを私は確信しています。

たとえば社会学部紀要（昭和四十三年の本学）には、「生活保護法における補足性の一考察」と題した先生の論文が発表されています。補足性というのは生活保護法第四条第一項に掲げられた原理であります。先生は法施行上の具体的問題を分析された上で、基本的人權の保障と地方自治の推進立場からも現行の保護の実施要領を全面的に改正すること、福祉事務所の機構を改革して民間人を含んだ福祉事務所運営委員会を設置して、民主主義的な保護の補足性を確立すべきこと、といった大胆な提案をされています。この論文は今日の価値をもっていますし、その後今日にいたっても福祉事務所の機構は依然旧態を保ったままです。こう考えますと、私共はもっともっと先生に学んでおくべきだったと後悔しているのです。

学外での先生の御活動についてもふれておきたいことがたくさんあります。佛教社会事業研究所長に就任されてからの先生は、とくに日本仏教社会福祉学会の理事として、学会活

動の充実に尽力されましたし、自坊を開放して老人憩の家を開設し、地域老人の福祉のために日夜努力されました。また京都市老人大学が毎年定期的に佛教大学で開催されるように京都市と本学との調整に当られました。このように社会福祉の増進のために骨身を惜しまれなかったと先生を失なったことは、社会福祉の世界にとっても大きな損失であります。

このように忙しい日々を送られた先生でしたが、海外旅行にも度々出かけられて見聞を広められました。特に私にとって印象に残るのは、四年前の春に先生と奥様のお供をして、フィリピンのミンドロ島に渡ったことであります。先生御夫妻はミンドロ島で戦死された弟さんの供養をなさりたい希望をかねてからお持ちでしたので、三十三回忌に当るその年、大阪からマニラに飛び、さらにミンドロ島サン・ホセに飛びました。ミンドロ島の戦闘状況については、大岡昇平の『ミンドロ島ふたたび』という作品にくわしいものですから、私共はその文庫本をもって出かけたのであります。大岡氏の作品を足がかりに私共はサンホセ市をあるき、東シナ海に面するマンガリン湾の砂浜で、先生は弟さんはじめ大部分のサンホセ警備隊員が玉碎したと思われるルタイ高地に向かって香

華を手向けられました。五色の浜に良く似た浜辺で思い出話をしておられた先生が、突然、夕陽が海上に没しようとする頃、その夕陽に向かって相当遠くまで独りで浜辺を歩いていかれ、その姿が、小さく見えなくなってしまうまで、私達が茫然と待っていたことを奇妙に覚えています。

先生についてお話したいことはもっとありますが、時間が来たようです。先生の御法名の中に社の字が入っています。社は福が止まって移らない状態を意味する字です。先生の御遺族のこれからのしあわせが続きますように、佛教大学のこれからの発展が持続するように、先生にお護り頂きたいと思えます。そして私達は、先生のあの世での御冥福をお祈りしたいと思えます。